

創立 150 年記念特集 **再発見!**

# 大谷探検隊とたどる **旅** 古代裂の

150th Anniversary Thematic Exhibition  
**Rediscovered!**

**Tracing the Journeys of  
Ancient Textiles and the  
Ōtani Expeditions**

令和 4 年 (2022) 9 月 21 日 日 曜 ~ 12 月 4 日 日 曜 東京国立博物館 東洋館 5 室

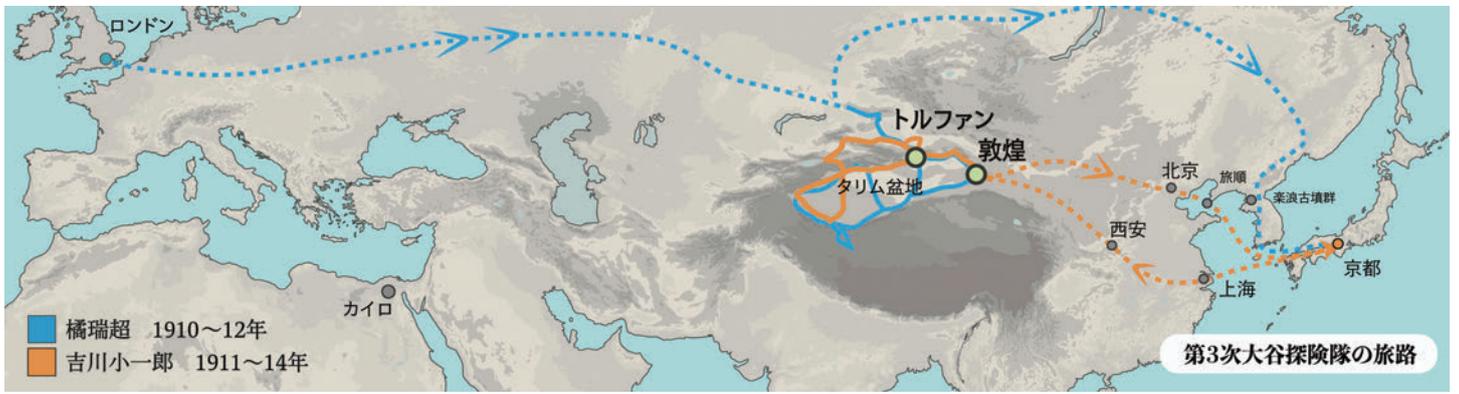
20 世紀初頭、浄土真宗本願寺派の大谷光瑞 (1876~1948) は、仏教がどのように東方に伝来したかを探るため調査団を結成しました。大谷探検隊とよばれるこの調査団は、計 3 回中央アジアを訪れています。吉川小一郎 (1885~1978)、橘瑞超 (1890~1968) による第 3 次探検隊は、明治 43 年から大正 3 年 (1910~14) にかけて、現在の中国・新疆ウイグル自治区トルファン (吐魯番)、甘肅省敦煌などで調査を行ない、仏典や仏画のほか多くの染織品の断片 (裂) も収集しています。たとえば、トルファンのアスターナ・カラホージャ古墓群からは埋葬されていた人びとの衣服などを、敦煌莫高窟からは仏教荘厳にかかわる裂を日本に持ち帰りました。これらの裂の多くは、昭和 27 年 (1952) に東京国立博物館 (以下、当館) に収蔵されました。大正期から昭和期の保存技術により、現在もガラスに挟まれて保管されています。

令和 3 年 (2021) に当館が行なった調査では、それぞれの裂の染織技術や文様に加え、製作当初の姿や用途も明らかになりました。これらの裂からは、ユーラシア大陸の東西をつなぐ要地として発展した 6 世紀から 10 世紀のトルファン、敦煌の仏教文化や染織技術をうかがい知ることができます。大谷探検隊の旅路をたどりながら、古代裂の魅力を掘り下げてご紹介します。

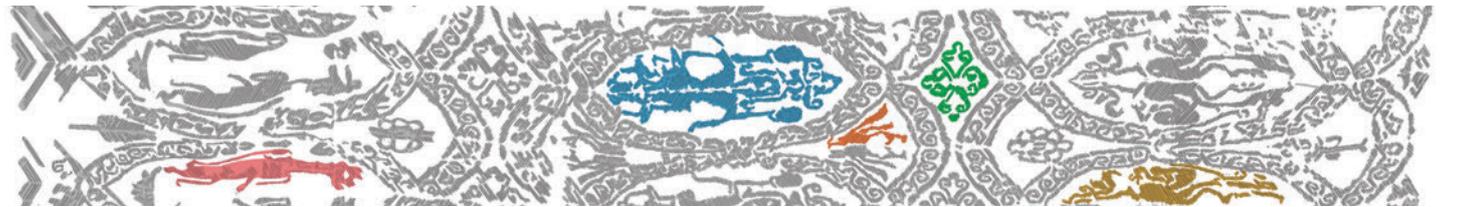
Many of the textiles collected and brought to Japan by the Ōtani expeditions were found in Dunhuang in Gansu Province and Turfan in the Xinjiang Uyghur Autonomous Region in present-day China. Fragments of Buddhist ornamental textiles from Dunhuang and burial clothing from Turfan reveal the many textile techniques and designs that traversed the continent.

During research conducted last year, curators “rediscovered” each textile’s original purpose as well as other details. Visitors are invited to trace the journeys of these textiles along with those of the Ōtani Expeditions while viewing the exhibition.





トルファンはタリム盆地の東北部に位置します。中国と西アジアの中継交易で栄え、仏教文化が花開きました。トルファン郊外のアスターナ・カラホージャ古墓群は、3世紀から8世紀に用いられた墓地です。文書や衣服、葬られた人びとのミイラなどがみつかっています。墓に納められた品々から、砂漠に浮かぶオアシス都市の文化をみてみましょう。



No.1 部分 (上) 文様復元図 (下)

### [1] 赤地渦輪違文入鳥獣人物文綾

Textile with Birds, Animals, and Figures inside Linked Circles

中国、トルファン、アスターナ・カラホージャ古墓群出土 魏氏高昌国時代 6世紀～7世紀前半 TI-505-58

アンペラ（ござ）の編み目の痕が残ることから、ミイラの敷布と考えられます。渦文を巡らせた楕円のなかには、文様復元図に示したように、四足獣（赤色）や鳥（橙色）、四葉（緑色）などの細かな文様が織り表わされています。なかでも、西アジア由来の宝冠を被った人物（青色）と中国由来の龍（黄土色）は、東西文化の融合を顕著に伝える文様です。



No.1 編み目の痕

### [2] 赤地格子連珠花文錦

Textile with Framed Repeating Circles with a Flower Inside

中国、トルファン、アスターナ・カラホージャ古墓群出土 魏氏高昌国～唐西州時代 7世紀 TI-506-94



参考  
重要文化財 蜀江錦帯  
(法隆寺献納宝物) 部分  
飛鳥時代 7世紀  
N-47

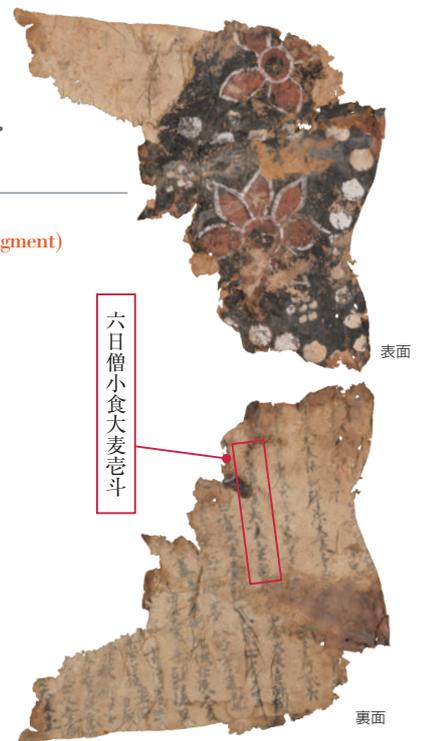
格子の中央に表わされた蓮華を、小さな珠が連なる輪とパルメット文で飾っています。仏教とササン朝ペルシアの要素が入り混じる特徴的な文様の経錦です。経錦は、紀元前5世紀頃から中国で長く織り続けられた技法で、本品とほぼ同じ文様の経錦が奈良・法隆寺にも伝来しています。6世紀から7世紀にかけて、このような文様が西はトルファン、東は日本まで広く伝わったことがわかります。

### [3] 泥絵彩色紙製頭巾・寺院糧食帳残欠

Hood Lined with a Temple's Food Consumption Record (Fragment)

中国、トルファン、アスターナ・カラホージャ古墓群出土 魏氏高昌国～唐西州時代 7世紀 TI-505-86

ミイラが被っていた頭巾の残欠で、表面に彩色された連珠と花文が華やかです。不要になった文書を貼り重ねてつくられており、裏張りの糧食帳には、僧侶たちが毎日食した大麦の量が記されています。当番で記録していたのか、日付ごとに筆跡が異なります。仏教寺院の日常がうかがえるとともに、当時のトルファンで、いかに食糧や紙が貴重であったかを伝えています。



六日僧小食大麦志斗

表面

裏面



敦煌は甘肅省の北西部に位置するオアシス都市です。シルクロードの要所であり、仏教文化の拠点として発達しました。4世紀から14世紀に造営された石窟寺院である莫高窟からは、多くの壁画や彫刻、古文書に加え、仏殿を飾っていた垂飾や幡の断片がみつかっています。



#### [4] 平絹・綾・夾纈縫い合わせ裂断片

##### Textile (Fragment)

中国、敦煌莫高窟 吐蕃～曹氏帰義軍期敦煌 8～10世紀 TI-505-8

四角形が連なるパッチワークから、寺院に奉納された端切れを縫い合わせた袈裟、あるいは褥（敷物）と考えられます。平絹、綾地綾文綾、刺繍など小さな裂もあますことなく丁寧に仕立てています。ひと針ひと針に込められた思いがうかがえる作品です。

#### [5] 紺地菩薩立像描絵平絹

##### Textile with a Bodhisattva (Fragment)

中国、敦煌莫高窟 曹氏帰義軍期敦煌 9～10世紀 TI-505-3

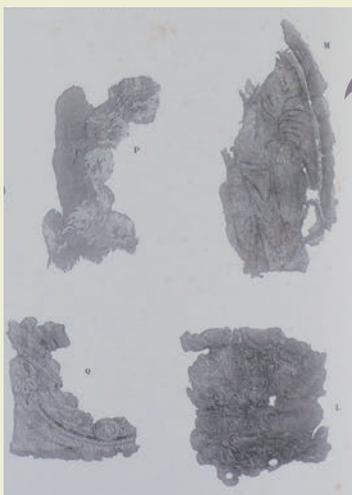
本来は菩薩立像を縦に連続して描いた長大な幡であったと推測されます。紺色の絹地に黄色の顔料で描かれており、顔の両脇に、リボン状に結われた天冠帯と円形の光背の一部をみることができます。



菩薩立像 頭部 復元想定図

## 西域 考古図譜

『西域考古図譜』上・下巻（1915～16年刊行）は、大谷探検隊の収集品のうち重要な約690点を掲載した図録です。「染織刺繍」の部に掲載された37点の裂のうち、13点が当館に所蔵されています。これらは大谷探検隊による当時の収集品の研究において、とくに重要な作品とみなされていたといえます。



香川黙識編「染織刺繍(7)」『西域考古図譜』上巻(国華社、1915年)部分 提供:東京文化財研究所



#### [6] 刺繍如来立像

##### Textile with a Buddha (Fragment)

伝中国 敦煌莫高窟あるいはムルトゥク 唐時代 8世紀 梅原龍三郎氏寄贈 TI-397

本品は、日本を代表する洋画家である梅原龍三郎(1888～1986)が当館に寄贈したものです。『西域考古図譜』に掲載されていることから大谷探検隊将来品であると判明しました。赤地平絹の地に鎖繡で密に埋めており、唐時代の高い刺繍技術を示しています。左手で袈裟をつかむ如来立像は、次のような「涼州瑞像」の伝説に由来すると考えられます。

5世紀頃、劉薩訶という高僧が涼州(現在の甘肅省)での仏像の出現を予言しました。ところが数十年後に雷で裂けた岩山から現れた仏像には頭部がなく、動乱が起こりました。北周が建ち安定した世になると仏像が現れたものの、皇帝が仏教を排斥すると地に落ちてしまいました。

国家や仏教の盛衰を仏頭が占うこの不思議な伝説は、中国西北部を中心に信仰されました。この伝説を造形化したとみられる、左手で袈裟をつかみ、鮮やかな色層を重ねた光背と岩山を背景とする如来立像の刺繍作品が、敦煌莫高窟で発見されています(イギリス・大英博物館所蔵)。特徴が類似する本品も、本来は岩山から出現する涼州瑞像を表わしたものであったでしょう。

#### [7] 連珠円文錦 (表紙右下)

##### Textile with Repeating Circles (Fragment)

伝中国 敦煌莫高窟あるいはムルトゥク 唐時代 7～8世紀 TI-505-27

珠を連ねた円の中に光輪を戴く鳥が、西アジアで発展した緯錦の技術で織り表わされています。『西域考古図譜』には、トルファン近郊のムルトゥク(木頭溝)で発見した裂と記されています。

[8] 垂飾 平絹綾夾纈羅裂縫い合わせ

Altar Pendants

中国、敦煌莫高窟 曹氏帰義軍期敦煌  
9~10世紀 TI-505-50

寺院を装飾するために垂らした飾りです。縫い合わせられた22種類の裂には多種多様な染織技法をみることができます。色とりどりの平絹、古代独特の技法を用いて花文を染めた華やかな彩りの染物、菱文を織り出した紋織物、経糸を複雑にからませた羅など、全体の形状だけでなく細部にまで当時の美が宿ります。



比較研究の  
まなざし

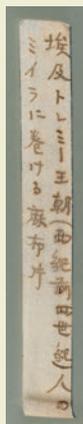
大谷探検隊に関連する当館の所蔵品には、トルファンや敦煌以外で出土した裂も含まれています。裂を挟んでいるガラスにつけられた付箋には、出土地とともに簡潔な解説が記されています。その記述からは、大谷探検隊が同時代の考古学的発見を参考にして比較研究や収集を行っていたことがわかります。

[9] 麻布

Textile

伝エジプト出土 ブトレマイオス朝時代  
前323~前30年頃 TI-505-90

本品は、古代エジプトで遺体をミイラにする際に用いた亜麻布です。19世紀から20世紀前半、エジプトで墳墓やミイラが相次いで発見されました。橋本瑞超は、イギリス留学の途上に立ち寄ったエジプトでミイラについて見聞しました。のちにトルファンの墳墓でミイラを発見すると、その学術的価値を大谷光瑞に手紙で訴えて収集されています。これらのミイラは、現在中国の旅順博物館が所蔵しています。大谷探検隊はエジプトでは発掘をしていないため、本品はトルファン出土品との比較資料として別途収集したと考えられます。



同付箋

[10] 漆紗

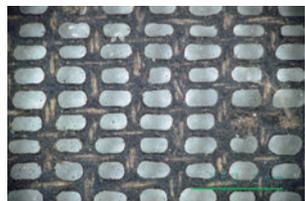
Lacquered Textile (Fragments)

伝中国 新疆出土  
漢時代  
前3~後3世紀  
TI-505-94



本品は古代東アジアの官僚が被った冠(漆紗冠)の一部と考えられます。新疆の出土品とされますが、付箋には「楽浪発掘品と同一物なり」とも記されています。朝鮮半島・平壤の漢時代の遺跡、楽浪古墳群の石巖里205号墳(1925年発掘)から出土した漆紗は、粗い平織に漆を塗ったもので、細部の特徴が本品と合致します。収集品の整理にあたり、類例を参照したのでしょうか。

◇ 技法解説



No.10 組織拡大

漆紗

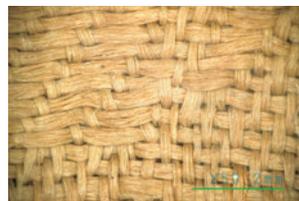
隙間をあけて織った平織の絹に、漆を塗って風合いを固くし、網状にします。



No.8 組織拡大

羅

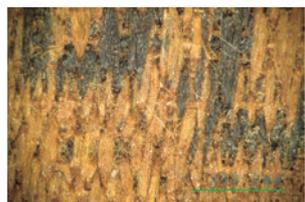
緯糸を織り入れるたびに左右の経糸を振って網状の隙間をつくり文様を織り出します。



No.4 組織拡大

綾地綾文綾

糸を規則的に浮かせて織る綾織を2種類組み合わせ、地と文様を織り出します。浮き糸が斜めに連なるのが特徴です。



No.2 組織拡大

経錦

複数の色糸からなる経糸で文様を織り出す厚手の織物です。



No.7 組織拡大

緯錦

複数の色糸からなる緯糸で文様を織り出す厚手の織物です。



No.6 組織拡大

鎖繡

表面で刺繡糸の小さな輪をつくり、その輪を鎖状につなげる刺繡技法です。



本特集は「博物館でアジアの旅 アジア大発見！」(会期：令和4年9月21日~10月16日)とも関連しています。  
表紙右上：大谷探検隊ラクダ隊写真 大正3年(1914) 吉川小一郎撮影 龍谷大学図書館

創立150年記念特集 再発見！ 大谷探検隊とたどる古代裂の旅

令和4年(2022)9月21日発行

執筆・作図：沼沢ゆかり、廣谷妃夏、展示企画：小山弓弦、沼沢ゆかり、廣谷妃夏、撮影：藤瀬雄輔ほか、翻訳：君波妙子(以上、東京国立博物館)、レベッカ・ハーモン (WritingWise)  
デザイン・制作・印刷：アイワード 編集・発行：東京国立博物館

©2022 東京国立博物館 Tokyo National Museum